

貴重図書展示「秋の名品展」

期間：2024年10月1日（火）～12月26日（木）
場所：中百舌鳥図書館 1階貴重図書展示ケース

どうじょうじえんぎえまき
道成寺縁起絵巻 写 二巻



道成寺所蔵本を江戸時代に入って土佐派の画家が忠実に模写したもの。模本であるがかなりの出来栄で、あるいは『考古画譜』が言う桑名松平家の模本であるかもしれない。

げんじものがたりにしきえ
源氏物語錦絵 刊 一合
三代歌川豊国画 一筆斎刊



一卷一枚で五十四枚揃。巻名の由来となった和歌、源氏香図を付す。

いぶき 刊 一冊
寛永9年(1632)



舞の本。整版丹緑本。幸若舞曲の刊本には古活字本と整版本があり、挿絵のあるものもないものがある。寛永頃に整版十行本が三十六番揃本として刊行されたが、本書はそれと同版。但し揃い本は刊記がないので、本書はいわゆるバラ売りされたものと思われる。



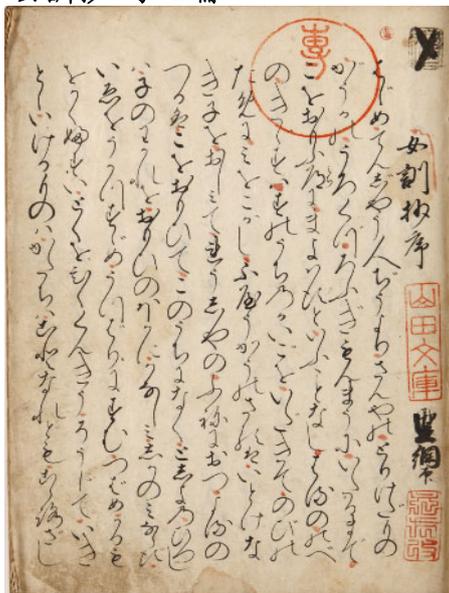
『源氏物語』の梗概書。文・絵ともに野口立圃の手になる。原作の和歌をほとんどおさめること、一九二にのぼる挿絵が中世の源氏物語絵の図案を踏襲していることなど、『源氏物語』の享受史上注目される。初版本である。

ゑぼしをり 写 二冊



舞の本、奈良絵本。判官物の義経元服より始まる物語で、謡曲「烏帽子折」との関係が深い。元和以後には版本が何度も出版された。本書には十九枚の奈良絵が収められている。

じょくんしょう
 女訓抄 写 二冊



浄土宗の立場から書かれた女性の教訓書。やや極端な形ながら当時の女性観と女性教育のあり方がうかがえる。成立年代は、はっきりしないが、寛永十年(一六三三)頃か。寛永十四年刊の古活字版のほか刊本は多いが、このような写本はめずらしい。万治から延宝にかけての写であろう。



井原西鶴作の浮世草子。初版である貞享五年（一六八八）正月刊の盛田屋版とは異版。京・大阪・江戸・西国・東国・近国の地域別の六巻に再構成したもの。刊記はないが、宝暦年間に柏原屋がこの板木を利用して半紙本を出版しているの、それよりは古い出版である。



外題には「謡曲 松風」とあるが、謡曲の『松風』をもとに奈良絵本風に仕立てたもの。江戸時代初期、寛永期の作例と見られる。写実的な絵もあるが、潮波み車などは舞台上で用いられる作り物を写しているらしく、江戸時代初期の『松風』の舞台をある程度反映していると考えられる。



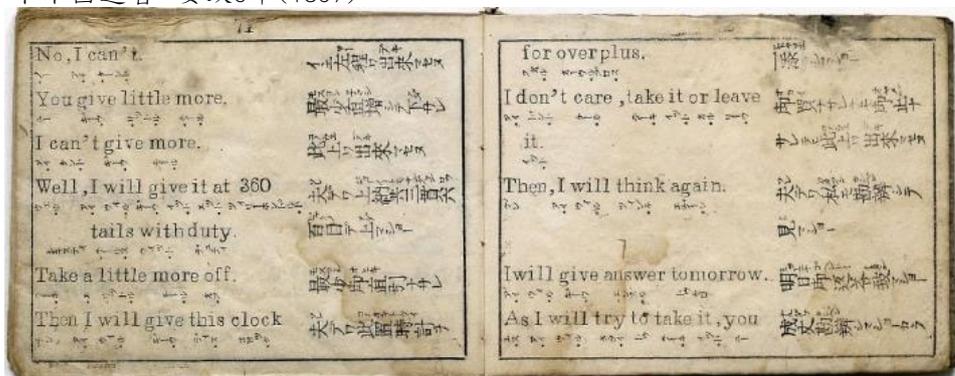
近松門左衛門の世話物浄瑠璃。七行四十九丁本。現在六種の正本が知られているが、そのうちの初版と考えられる。

ほんちようもんぜん
本朝文選 刊七冊



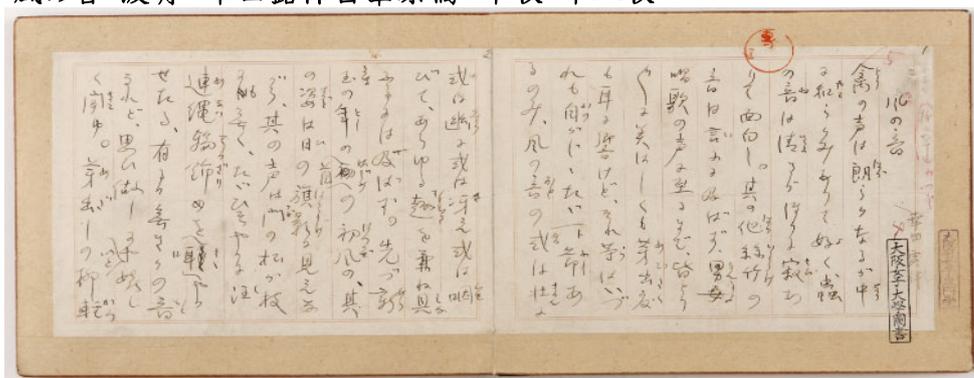
許六編。蕉門の俳文を集めた最初の選集。宝永三年（一七〇六）の刊行後、まもなく書名などにつき批判を受けたので「風俗文選」と改められ、その名で流布している。本点は初版の書名題箋をもつ稀観本。

わえいしやうこたいわしやう
和英商賈対話集 初編 刊一冊
本木昌造著 安政6年(1859)



日本人の手になる英会話書としては、最も早いもののひとつである。カタカナの小書を利用して発音表記に工夫をこらし、和訳文は表音式仮名遣い。日用のはなし言葉で二五〇の会話の例文をあげる。

風の音・渡舟 幸田露伴自筆原稿 十枚・十八枚



それぞれ『グラフィック』明治四十三年（一九一〇）一月下旬号・二月下旬号に掲載されたもの。露伴が『折々草』の総題の下に、同誌に四回にわたって連載した、随筆的な小品四篇の内の二つにあたる。